〔駒沢女子大学　研究紀要　第13号　p.99～117　2006〕

スペイン語の譲渡不可能所有構文
―基本的特性と問題点―

加 藤 ナ ツ 子

The Inalienable Possessive Construction in Spanish
―Basic Properties and Problems―

Natsuko KATO

This paper investigates the basic syntactic properties of the inalienable possessive construction in Spanish. The most typical cases of inalienable possessive nouns are those that denote body parts. These nouns are defined in terms of the whole or their possessors of which they are parts. Though inalienable possession is essentially a notion of semantic dependency mentioned above, some salient syntactic restrictions are observed in sentences with inalienable possessive nouns.

The first two sections of this paper present a survey of former studies, which are reviewed and discussed in the third section. In the fourth section, some of the syntactic properties of the inalienable possessive construction in Spanish are discussed based on newly acquired data.

0. はじめに

名詞にはその語彙特性として他の名詞との関係を内在的に含むものがあり、関係名詞(relational noun）と呼ばれる。身体部位名詞に代表される譲渡不可能所有（inalienable possessive）名詞はその意味に所有者を内在的に含む典型的な関係名詞である[1)]。身体部位名詞は、その所有者である全体に属する一部分であり、「部分（身体部位）―全体（所有者)」の関係が譲渡不可能な所有の本質をなす。譲渡不可能な所有という概念は、このような意味的依存の概念であるが、譲渡不可能所有名詞を含む文には統語的制約が存在し、特にロマンス語と英語との比較において、多くの理論的関心の対象となってきた。

本稿では譲渡不可能所有構文に関する先行研究を紹介し、スペイン語におけるこの構文の統語的特徴を考察する。第１節ではスペイン語の譲渡不可能所有構文に関する、伝統文法から生成文法研究の成果までを含む詳細な記述 Picallo y Rigau（1999）を概観する。第２節では Vergnaud and Zubizarreta（1992)、Guéron（1985)、Demonte（1988)、Zagona（2002）の理論的分析を紹介する。第３節では以上の先行研究から明らかになる問題点を整理し、第４節では新たに採取したデータも用いてスペイン語の譲渡不可能構文の統語的特徴を考察する。

1．スペイン語譲渡不可能所有構文の特性—Picallo y Rigau（1999）

スペイン語の譲渡不可能所有名詞を含む文の統語的特徴には、(i) 限定詞の制約、(ii) 品質形容詞の共起制約、(iii) 配分的解釈、(iv) 所有与格との共起などがある。特に重要なのが限定詞の制約と所有与格との共起であるが、後者については動詞の種類に基づく分類が示されている。

1.1．限定詞の制約

譲渡不可能所有名詞は通常定冠詞を伴い、定冠詞を所有詞にかえると完全に非文法的ではないにせよ、許容度が低い文となる。

(1) Juan movió la/?su cabeza
moved the/his head

所有詞が容認可能になるのは、強調の文脈やなんらかの距離を表現したい場合である。(1) で所有詞を使うと再帰の意味が弱まる。(2a) と (2b) はどちらも可能だが、所有詞を伴う後者の頻度は低く、より有標になる。

(2) a．Los ojos se me llenaron de lágrimas
the eyes me filled of tears
b．Mis ojos se llenaron de lágrimas
my eyes filled of tears

脚、腕、指など複数個ある身体部位名詞の場合は指示詞、不定量化詞と共起できる。

(3) a．Me rompí este brazo
I broke this arm
b．*Me duele esta cabeza
me hurts this head
c．Le duelen algunos dedos de los pies
him hurt some toes of the feet

(4) が示すように等位構造では、限定詞の欠如も可能である。

(4) a．A Luisa le temblaban piernas y brazos
to her shook feet and arms
b．*A Luisa le temblaron piernas.

所有または所属を表わす動詞 tener (have) の場合、身体部位名詞は定冠詞、不定冠詞と共に、または限定詞なしで現れることができる。全て形容詞句を伴うが、これらは修飾語句としてではなく、述語としてふるまう。

(5) a．María tiene las/unas piernas muy bellas
has the / a (pl. fem.) feet very beautiful
b．María tiene bellas piernas

動詞 tener は通常所有詞と共起しないが、次のような認証の場合は可能である。

(6) El bebé tiene su nariz, su boquita, sus manitas...
the baby has its nose, its mouth, its hands...

1.2. 品質形容詞の共起制約

身体部位を表わす譲渡不可能所有名詞は定冠詞を伴う場合、品質形容詞や前置詞句によって修飾できない。

(7) a. *Levantó los peludos brazos
he-raised the hairy arms

b. *Juana me lavó el pelo de seda
me washed the hair of silk

しかし所有詞と共起する場合には、tus ojos azules (your blue eyes) のように、記述的形容詞による修飾が可能である。複数個ある身体部位の場合は、el brazo izquierdo (the left arm) のように限定的修飾が可能である。(8)のように指示詞を伴う場合も形容詞で修飾できる。

(8) Limpiaremos esta nariz tan sucia
we-will-wash this nose so dirty

この文で nariz は関係名詞としては扱われない。

1.3. 配分的解釈

所有者が複数の場合に、譲渡不可能所有名詞は配分的解釈を受ける。

(9) Les lavaron la cara a los niños
them they-washed the face to the children

この場合、身体部位名詞を複数にすることはできない。

1.4. 所有与格との共起

譲渡不可能所有の表現において所有の値をもつ与格代名詞が用いられることは、スペイン語および他のロマンス語の大きな特徴である。この与格は伝統文法では所有与格と呼ばれるが、dar (give) のような動詞の間接目的語とは異なり、動詞に選択されるものではない。所有与格を所有者とする譲渡不可能所有名詞の限定詞は定冠詞に限られる[2)]。所有与格は動詞の主題 (theme) 項である内在的に関係的な名詞と共起し、(10)のように間接目的語の重複が可能である。

(10) Le peiné la melena a tu sobrina
her I-combed the mane to your niece

他の与格とは異なり、所有与格は(11)のように叙述補部をとることが可能である。

(11) Juan le peinó la melena (a tu sobrina) sentada
her combed the mane (to your niece) sat

1.4.1. 所有与格と共起する動詞

譲渡不可能所有名詞と所有与格の共起の可能性は、動詞の種類によって異なる。

◆ 作因動詞：quemar (burn), abrir (open), cerrar (close), curar (cure) 等、および対応する再帰動詞

譲渡不可能な所有の名詞句が直接目的語の位置を占め、所有者が名詞の補部によって表現されていない場合、(12a) のように所有与格 les と共起できる。

(12) a. El sol les quemó la piel
the sun them burned the skin
b. El sol quemó la piel de los turistas
the sun burned the skin of the tourists

(12b) では所有者が名詞の補部に明示されているので与格代名詞は現れることはできない。

作因動詞の主題を主語にとる始動動詞、過程動詞などは、(13) のように与格の存在を要求する。

(13) La piel se les quemó
the skin them burned

◆ 目的語が被作用的主題である動作主他動詞：lavar (wash), arreglar (arrange), herir (hurt) 等

(14) a. Juan te arregló el pelo
you arranged the hair
b. Juan se hirió el pie
hurt the foot

(14b) では、与格が再帰代名詞で、主語と同一指示である。その場合主語と指示的に関係している代名詞 se が、部分と関係している全体を示す。

◆ 運動を表す動作主他動詞：mover (move), levantar (raise), poner bien (praise) 等

(15) a. El doctor le movió los brazos
the doctor him moved the arms
b. El doctor movió los brazos
the doctor moved the arms

これらの動詞の場合、(15a) のように所有与格が共起する場合も、(15b) のように共起せず、所有者が主語の場合も可能である。

◆ 知覚動詞：mirar (look), ver (see), tocar (touch), notar (notice), sentir (feel) 等

知覚動詞の主題は動詞の行為によって作用を受ける主題ではないが、スペイン語では (16) のように、他のロマンス語とは違って所有与格が可能である。

(16) a. Te miraba la nariz
you I-looked the nose
b. Le tocó la mejilla
him she-touched the cheek

◆ 感情動詞：querer (love), odiar (hate), estimar (respect), admirar (admire) 等

これらの動詞の振る舞いは統一的ではない。admirar の場合、所有与格は可能ではあるが (17a)、所有詞の方が好まれる (17b)。

(17) a. Le admiro la estatura
him I-admire the height
b. Admiro su estatura
I-admire his height

◆ querer の場合、所有与格は不可能で、所有詞を用いなければならない。

(18) a. * Te quiero el corazón
you I-love the heart

b. Quiero tu corazón
I-love your heart

◆ 主語に譲渡不可能所有名詞が来る非対格動詞：arder (burn), salir (come out), crecer (grow), subir (climb), bajar (lower), caer (fall), sobrevivir (survive), hervir (boil) 等

(19) a. El corazón me ardía de pasión
the heart me burned of passion

b. Al bebé ya le salen los dientes
to the baby already him come out the teeth

◆ 自動詞：llorar (cry), saltar (jump), temblar (shake), brillar (shine), chispear (sparkle) 等

通常動作主主語を要求する自動詞 llorar, saltar, temblar などは、主語の譲渡不可能名詞が所有与格と共起する(20)のような場合、主語は動作主の値を失う。非動作主的自動詞の brillar, chispear なども所有与格を許す。

(20) a. Los ojos me lloran
the eyes me cried

b. Le tiemblan las manos
him shake the hands

c. ¡Cómo te brillaban los ojos!
how you shone the eyes

1.4.2. 前置詞補部の譲渡不可能所有名詞と所有与格の共起

所有与格は前置詞補部にある譲渡不可能所有名詞と「部分―全体」の関係を確立できる。(21a)で la boca は与格接語としか関係づけられないが、(21b)の la mano は主語または接語と関係付けられる。

(21) a. Le metió el puño en la boca
him he-put the fist in the mouth

b. Le tapó la boca con la mano
him he-covered the mouth with the hand

この差は、meter が前置詞補部を選択するのに対し、tapar は前置詞句を選択しないことによる。しかし次の対比が示すように、前置詞句補部に含まれる譲渡不可能所有名詞が常に与格接語と「部分―全体」の関係を確立できるわけではない。

(22) a. Sueño con tu rostro
I-deram with your face

b. *Te sueño con el rostro

1.5. 動詞が選択する与格との共起

動詞が選択する間接目的語が、主語または直接目的語と意味的に関係する場合、(23)のように、与格接語と譲渡不可能所有名詞句が「部分―全体」の関係を確立できる。

(23) Su presencia te devolvió la sonrisa
his presence you returned the smile

しかし譲渡動詞 dar は「部分―全体」の関係を確立できない。(24)では主語の名詞句が与格接語の表わす全体の一部として解釈され、la mano は le ではなく Juan の一部として解釈される。

(24) Juan le dio la mano
him gave the hand

また、(25a)では主語の la cabeza は与格接語の me と「部分―全体」の関係をなすが、(25b)では la cara を le に関係付けることはできない。

(25) a. Me duele la cabeza
me aches the head

b. A Juan no le gusta la cara
to not him likes the face

1.6. 所有与格を必要としない動詞

所有与格を必要とせず、所有与格があると意味が変わってしまう動詞類がある。

◆ 運動動詞の限られた類：mover (move), bajar (lower), levantar (raise), cerrar (close) など、中枢神経の作用によって引き起こされる身体部位の動きを表す他動詞

直接目的語の身体部位名詞はそれ自体で一定の運動を生産できるものでなければならない。(26a)の ojos はこの条件を充たすが、(26b)の venas は充たさないので、所有与格が必要になる。

(26) a. María abrió los ojos
opened the eyes

b. María se abrió las venas
opened the veins

◆ tener 等

それ自体で所有・所属を表す動詞 tener は所有与格を許さない。

(27) Juan tiene los ojos muy claros
has the eyes very clear

(27)の形容詞句は修飾語句ではなく、1.1.で見たように、los ojos の特性を述べる述語として機能している。llevar (wear), poner (put) など、また sentir (feel), notar (notice) などの知覚動詞も所有与格・所有代名詞なしに「部分―全体」の関係を表す。

(28) Lleva el pelo suelto
has the hair loose

◆ 視覚または触覚による接触の動詞

これらの動詞の中には、(29a)のように所有与格を伴う場合と、(29b)のように譲渡不可能所有名

詞が前置詞句の中に現れ、全体を表す句が直接目的語に現れる非与格構文がある。

(29) a. Le miró los ojos
　　him she-looked the eyes
　b. La miró a los ojos
　　her he-looked to the eyes

また、身体部位名詞が主語で、直接目的語が全体を表す作因他動詞の場合もある。

(30) A mi papá　lo　mató　el corazón
　to my father him killed the heart

2. 他言語との理論的対照—Guéron（1985）等

Guéron（1985）と Vergnaud and Zubizarreta（1992）はフランス語と英語の比較に基づき、譲渡不可能所有構文に関する理論的な提案を提示している。Demonte（1988）、Zagona（2002）ではスペイン語のこの構文に関して、理論的解釈の部分的試みがなされている。

2.1. Guéron（1985）

譲渡不可能所有構文のフランス語と英語の差が、PRO 包含パラミター（PRO-inclusion parameter）と語彙的連鎖（lexical chain）で説明されている。(31)、(32) において、フランス語では名詞が譲渡可能な読みと譲渡不可能な読みが可能だが、英語では譲渡不可能な読みしか可能ではない。

(31) a. Jean lève la main
　b. John raised the hand

(32) a. Je lui ai coupé les cheveux
　b. I cut the hair for her

Guéron はフランス語の限定詞に PRO を仮定することでこの差を説明する。フランス語の限定詞は性・数・三人称素性をもち AGR を含むため、代名詞的照応形 PRO として、即ち独立した指示をもたない代名詞形として機能できる。英語の限定詞は AGR を含まないので PRO 限定詞ではない。

譲渡不可能所有構文における身体部位 NP は所有者 NP に指示的に依存している。所有者 NP は身体部位 NP を含む S の項でなくてはならず、身体部位 NP またはその痕跡を c 統御しなくてはならない。さらに身体部位名詞は記述的形容詞を伴えず[3]、指示表現ではあり得ない。従って意味役割を得るためには、指示表現である所有者 NP に束縛され、語彙的連鎖を形成しなければならない。(32a) では lui と les cheveux が語彙的連鎖を形成する。

(33) のように身体部位名詞が PP 補部に生起する場合、フランス語も英語も譲渡不可能所有の解釈が可能である。

(33) a. Elle l'ai tiré par les cheveux
　b. She pulled him by the hair

これらの文の PP は通常の随意的位置格 PP とは異なり、(34) が示すように削除することはできない。

(34) a. She took him by the shoulders

b．*She took him

そこでGuéronはこれらの文では、Vの補部とPの補部が共同で単一の項を構成すると仮定する。PPはVとPの統御の下、同一指標化によって動詞複合体に統合される。(35a)のLFは(35b)になる。

(35)a．She pulled him by the arm.

b．She pulled^{k} him$_{i}$ by^{k} ［the arm e$_{i}$］

Vは一次的意味役割をhimに付与し、Pの補部にはV＋Pが共同して二次的意味役割を付与する。動詞は両方の補部に同時に作用する行為を表し、身体的行為を指示するものでなければならない。

2.2．Vergnaud and Zubizarreta（1992）

フランス語と英語の譲渡不可能構文の差を、タイプ解釈とトークン解釈という二つの異なる定指示表現解釈を区別することにより説明する[4)]。

フランス語における譲渡不可能所有構文は、外的所有者（external possessor）構文と内的所有者（internal possessor）構文に区別される。外的所有者構文では(36a)のように所有者項が譲渡不可能名詞を含む句とは別の項であり、内的所有者構文では(36b)のように譲渡不可能名詞を含む名詞句内に所有者項がある[5)]。

(36)a．Le médecin leur a radiographié l'estomac

the doctor　to　them X-rayed the stomach

b．Le médecin a radiographié leurs estomacs

the doctor X-rayed their stomachs

外的所有者構文と内的所有者構文には次のような差がある。

(37)a．配分的解釈　外的所有者構文では厳密に配分的な解釈（distributive interpretation）が得られるが、内的所有者構文では必ずしもそうではない。

b．文法的数　いくつかの譲渡不可能な身体部位名詞（胃、喉、鼻など）は外的所有者構文では所有者が複数であるか否かにかかわらず、義務的に単数だが、内的所有者構文では単数でも複数でもよい。

c．修飾　外的所有者構文における譲渡不可能句は限定形容詞による修飾しか可能でないが、内的所有者構文では譲渡不可能句を修飾し得る形容詞の種類に制限はない。

Vergnaud and Zubizarreta（1992, 604）

(37a)の配分的解釈とは、(36a)のように単数の譲渡不可能名詞表現が複数の所有者に関係付けられて複数個の存在が解釈されることである。即ち叙述関係によって単数定名詞表現が複数表現と関連付けられる場合のみに得られるもので、叙述関係に関しては（Williams 1980）に従い束縛関係であるとする。

これらの特性をさらに理解するために、彼らは内在的に譲渡不可能ではない名詞を含む次のような文を考察する。

(38)On a donné le même ordinateur à Sophie, à Justine, et à Cléa

someone gave the same computer to Sophie, to Justine and to Cléa

この文は、三人で一台のコンピューターをもらったという解釈と、三人がそれぞれ一台ずつ同じ種類のコンピューターをもらったという解釈が可能である。前者の「同じコンピューター」はトークンをさし、後者ではタイプをさす。すなわち適切な文脈が与えられれば、タイプ解釈では外的所有者構文と同様の配分的解釈が得られる。

彼らの仮定では、[$_{DP1}$ D NP] においてDPはトークンを表示し (denote)[6]、NPはタイプを表示する。[$_{DP1}$ [$_{D1}$ ce] [$_{NPj}$ chat]] においてDPが表示するトークン1は、NPが表示するタイプjを具現化する。すると(38)のタイプ解釈では、定限定詞leは補部の名詞ordinateurを具現化していないので、フランス語の定限定詞leは表示の観点からは虚辞 (expletive) として、つまり表示内容のない限定詞として機能することになる。(38)のVP内で、NPのordinateurはDPのà Sophie, à Justine, et à Cléaに束縛され、配分的解釈が得られる。この束縛関係が成り立つためには、leは虚辞でなくてはならない。従って、タイプ解釈と配分的解釈の間の対応関係が成り立つ。

外的所有者構文でestomac、gorgeaなどの身体部位名詞が、所有者の単複にかかわらず単数形になるのは、人間の身体部位がタイプであるという内在的意味特性による。譲渡不可能所有名詞が意味的に依存した実体であるということを具体的に述べると、人間の身体部位タイプは、二本の腕や脚、一つの胃や喉などを具えた典型的な一人の人間に関連して定義されるということである。つまり、身体部位名詞の数は、典型的な人間に関する解釈可能性によって制御されているのである。

フランス語と英語の譲渡不可能構文の差は、両言語の限定詞の差に帰される。フランス語では限定詞とNPの間に一致関係が成り立ち、定限定詞が虚辞であり得るが、定限定詞が不変の英語では虚辞としては機能できない。従って英語で定限定詞はタイプを表示する表現には存在できない。そのため、(39)のような文における直接目的語を譲渡不可能とは解釈できない。

(39) The children raised the hand

フランス語においても、英語においても、kiss, punch, tickle, touchのような動詞では、譲渡不可能項が直接目的語と関連する位置格の前置詞補部として表出できる。(40a)は(40b)のように言い換えることが可能である。

(40) a. John kissed the children on the cheek
　　b. John kissed the children's cheeks

このような動詞は換喩 (metonymy) を認可し、部分 (PP補部) が全体 (直接目的語) と同一視されることを許す。即ち、(40a)が表わす命題とJohn kissed the childrenの命題とには含意関係が存在する[7]。

2.3. Demonte (1988)

いわゆる心性与格が生起する(41)のような例で名詞が譲渡不可能な場合、所有詞は不可能である。名詞が譲渡可能な場合、所有詞は可能だが、使用しないのが普通である。

(41) a. A Juan se le quemó **la** /***su** mano
　　to　　him burned the/*his hand
　　b. A Juan se le quemó **la** /%**su** casa
　　to　　him burned the /%his house

Demonte はこのような例で、名詞句の指定部に空範疇 PRO の存在を仮定し、その PRO を c 統御する接語によって PRO が統語的に制御されると主張する。すなわち不定詞の空主語への指示付与と同じく、制御者と空範疇 PRO が同一指示になる。さらに(42)が示すように、抽象名詞の場合にはこの関係が成り立たず、物質的所有の対象になる具象名詞の場合のみ、指定部に PRO を伴い、その PRO は所有者項によって占められる。

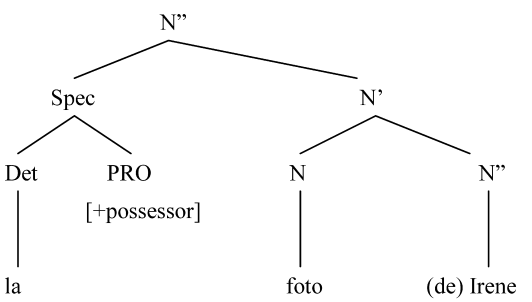
(42) a. La$_i$ casa no me$_i$ atrae últimamente
the house not me attracts lately

b. La belleza$_{j/*i}$ no le$_i$ atrae a María últimamente
the beauty not her attracts to lately

具象名詞の指定部に生成される PRO がなぜ所有者しか意味しないかについては、(43a)で NP の la foto de Irene が制御されている場合を考察している。この解釈で、写真の所有者は Juan で、Irene が写真の被動者または主題である。Demonte は、NP の la foto de Irene に(43b)のような構造を仮定する。

(43) a. A Juan se le perdió la foto de Irene
to him lost the photo of Irene

b.



Demonte (1988, 97)

指定部には二つの位置が仮定され、一方は定冠詞または指示詞などの限定詞が占め、他方は制御される PRO が占め、そこに所有詞が位置する。これは定冠詞と所有詞が共起する他のロマンス語や中世のスペイン語では自然な構造だが、現代スペイン語では両者が共起できないので、それを排除するフィルターが必要となる。

Demonte はさらに動詞の屈折も接語であると仮定した上で、全ての接語は制御者であるという一般化をしている。(44a)の構造は(44b)のようになり、接語が同一指示の NP を c 統御している。

(44) a. Lleva$_i$ un crucifijo en **las**$_i$ manos
holds a cross in the hands

b. [$_{INFL''}$ pro [$_{INFL''}$ [$_{INFL}$-a] [$_{VP}$ [$_{V'}$ llev- un crucifijo]]] [$_{PP}$ en las manos]]]

さらに接語による制御のプロセスには最短距離の原理も関与し、接語 INFL が制御者になれるのは、与格または対格の接語がない場合のみとする。

PRO の存在は具象名詞のある構造で義務的であるが、制御は常に義務的ではない。義務的なのはごく一部の名詞に限られ、最も義務性が高いのは身体部位と衣服を指示す名詞で、次に高いのは人

間関係と親戚関係を表す名詞である。その他の場合には制御関係はかなり低くなる。

2.4. Zagona (2002)

Zagona は動詞による目的語への主題付与の観点から譲渡不可能所有構文を説明している。(45)が示すように、接触動詞の間接目的語は、直接目的語と交替する。

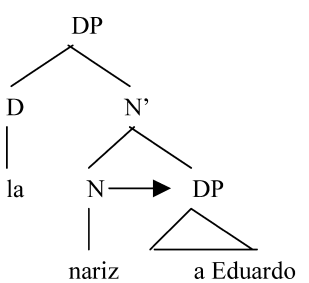
(45) a. José les golpeó las rodillas a sus amigos
J. CL(Dat.) hit the knees to his friends
b. José golpeó a sus amigos en las rodillas.
J. hit PA his friends on the knees

(45a)で動詞 golpear は直接目的語と間接目的語をとるが、主題的には二つの主題役割をとるものではない。(45b)では、golpear は単一の目的語をとる他動詞で、直接目的語の sus amigos に「主題」の主題役割が与えられ、対格が付与される。en las rodillas は、以下の例で hacerlo 置換が可能なことから、V ではなく V'に付加した場所の付加詞であることが分かる。

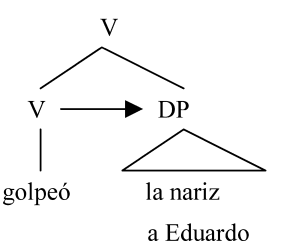
(46) Juan golpeó a Eduardo en la nariz, y Pedro lo hizo en la oreja
Juan hit Eduardo on the nose, and Pedro did so on the ear

(45a)でも(45b)同様 golpear は直接目的語の las rodillas に「主題」の主題役割を与える。間接目的語が直接目的語の身体部位の譲渡不可能所有者なので、二つの目的語が動詞から異なる主題役割を付与されることはあり得ない。両者は(47a)の構造が示すように動詞の単一項を構成し、補部内部の主題付与関係によって「部分―全体」の関係を表す。間接目的語は直接目的語の身体部位名詞によって所有者の主題役割が付与される。さらにこの DP は(47b)が示すように、動詞によって主題役割が付与される。

(47) a.



b.



Zagona (2002, 146-147)

3. 先行研究の考察

この節では、第 1 節と第 2 節で概観した先行研究が提示する問題点の中から、まず譲渡不可能所有名詞と所有者項との統語関係を整理し、次に限定詞に関する制約に関する理論的提案をまとめる。

3.1. 譲渡不可能所有名詞と所有者項との統語関係

Picallo y Rigau (1999) に基づき、スペイン語における譲渡不可能所有名詞と所有者との統語関係は(48)のように整理できる。

(48)

	譲渡不可能所有名詞（部分）	所有者（全体）
a.	直接目的語	主語
b.	直接目的語	間接目的語（与格接語）
c.	主語	間接目的語（与格接語）
d.	主語	直接目的語（対格接語）
e.	前置詞補部	主語
f.	前置詞補部	与格接語
g.	前置詞補部	対格接語
h.	前置詞補部	直接目的語

この分類は、動詞の種類、前置詞補部が動詞に選択されるか否かでさらに下位分類されるが、(49)に代表的な例文を一つずつ示す[8]。

(49) a. Marta giró la cabeza (MF21)
turned the head

b. Le cogí la mano (MR96)
him I-took the hand

c. El pelo le tapaba las orejas (MF103)
the hair him covered the ears

d. A mi papá lo mató el corazón (=30)
to my father him killed the heart

e. Me miró con un leve brillo en los ojos (SB280)
me she-looked with a slight luster in the eyes

f. Martina me puso una mano en el brazo (LC250)
me put a hand in the arm

g. Fernando la miró a los ojos (MF26)
her looked to the eyes

h. Tomó a Marta por los hombros (MF263)
he-took by the shoulders

所有者項は、譲渡不可能所有名詞句を含む文の項でなければならない。Guéron は、所有者 NP は譲渡不可能所有 NP を含む S の項でなくてはならず、譲渡不可能所有名詞 NP またはその痕跡を c 統御しなくてはならないとしているが、(48c, d) のように譲渡不可能名詞が主語で、所有者が目的語の場合があるので、c 統御の関係はスペイン語では成り立たない。

3.2. 限定詞に対する制約

スペイン語やフランス語のようなロマンス語と英語とでは、譲渡不可能所有名詞と共起する限定詞が異なる。(50a)、(51a) は Guéron によるフランス語の例文 (1)、(2) を対応するスペイン語にかえたものである。

(50) a. Juan levantó **la** mano

b．John raised **the** hand

(51) a．Le corté **el** pelo

b．I cut **the** hair for her

身体部位名詞の限定詞に定冠詞が生起することにより、スペイン語では所有者の主語または与格接語と「部分―全体」の関係が成立するが、英語では成立せず、身体部位名詞を譲渡不可能所有名詞と解釈することはできない。スペイン語と英語のこの差は、両言語の限定詞の性質の差による。フランス語と英語の対比で Guéron が仮定しているように、スペイン語の限定詞は AGR をもつので代名詞的照応形 PRO であるのに対し、英語の限定詞は AGR をもたないので PRO 限定詞ではないとするならば、譲渡不可能所有名詞が所有者 NP に照応束縛されると捉えられる。Vergnaud and Zubizarreta による表示の観点からは、スペイン語の限定詞は虚辞として機能できるが、英語ではできないことに両言語の差は帰される。

Demonte によると、スペイン語の譲渡不可能所有名詞の限定詞は補部に［＋possessor］素性をもつ PRO を取り、与格接語及び INFL により PRO が制御され同一指示付与を受けて、所有者と譲渡不可能所有名詞が関係付けられる。これに付随して仮定しなければならないのは、定冠詞と所有詞の共起を排除するフィルターである。さらに PRO 制御は譲渡不可能所有名詞に限られるという条件付けが必要となる。また INFL も接語であると仮定し、接語 INFL による制御には最短距離の原理が関与し、接語 INFL が制御者になれるのは、与格または対格の接語がない場合のみとされる。しかし、与格接語があっても、与格が所有者ではなく、主語が所有者の(52)のような場合がある。

(52) a．Me tendió las manos（SB63）

me she-extended the hands

b．Le había metido las manos por debajo de la chaqueta（MF260）

him she-had put the hands through under the jacket

動詞が clavar（hammer), quitar（remove), poner（put）などの場合や、Picallo y Rigau（1999, 1017）が指摘するように dar（give）の場合も、与格ではなく主語が所有者である。

特定の動詞の前置詞句補部に譲渡不可能所有名詞が生起する場合には、スペイン語も英語も、定限定詞を伴って所有者の直接目的語と「部分―全体」の関係を確立できる。(53)は Guéron による例文(3)、(54)は Vergnaud and Zubizarreta による例文(10)のフランス語を対応するスペイン語にかえたものである。

(53) a．Ella lo tiró por el pelo

b．She pulled him by the hair

(54) a．Juan besó a los niños en la mejilla

b．John kissed the children on the cheek

Guéron は、(53)では動詞が一次的意味役割を him に付与し、前置詞の補部には V＋P が共同で二次的意味役割を付与する、即ち V の補部と P の補部が共同で単一の項を構成すると仮定する。Vergnaud and Zubizarreta は、(54)では動詞が PP 補部の譲渡不可能名詞（部分）を直接目的語（全体）と同一視する換喩を認可すると主張する。

(55)は Zagona による例文(15)であるが、２つの目的語を取る(55a)も(55b)同様に単一の主題役

割を付与される。

(55) a. José les golpeó las rodillas a sus amigos

b. José golpeó a sus amigos en las rodillas

直接目的語の身体部位名詞は間接目的語に所有者の主題役割を付与し、さらに動詞が DP に主題役割を付与する。その根拠は、golpear のような接触動詞の間接目的語は直接目的語である譲渡不可能所有名詞の所有者であり、異なる主題役割を付与され得ないことによる。

以上で見た理論的分析は、譲渡不可能所有名詞の限定詞に定冠詞が生起する場合に基づくものである。

4. データに基づく考察

この節では、新たに採取したデータに基づき、スペイン語の譲渡不可能所有構文が提示する統語的特性を整理、考察する。前節で見たように、先行研究では譲渡不可能所有名詞の限定詞に定冠詞が生起する場合が考察されていた。本稿のために新たにデータを採取した目的の一つは、定冠詞以外の限定詞が用いられる統語環境を明らかにすることにある。まず譲渡不可能所有名詞の限定詞に所有詞、不定冠詞等他の限定詞、また無冠詞が許される文脈を概観し、さらに動詞 tener の場合、および形容詞の制約について考察し、最後に配分的解釈に関する事実を見る。

4.1. 定冠詞以外の限定詞

RAE (1973, §3.10.9, p. 428) は、スペイン語では所有詞を用いる (56a) より、所有詞を用いない (56b) の方が好まれ、さらに (56c) のように与格代名詞を用いる方が良いとする。

(56) a. He dejado **mi** gabán en **mi** casa

I-have left my overcoat at my home

b. He dejado **el** gabán en casa

c. **Me** he dejado **el** gabán en casa

直接目的語位置の譲渡不可能名詞の限定詞に所有詞が生起すると、RAE (1973) の指摘するように冗長性が感じられる、あるいは強調など、何らかの文体的効果を生む。しかし、(57)～(59) のような例から、所有詞の生起は完全には排除されないことが分かる。

(57) a. Vio **su** rostro en el espejo (MF231)

she-saw her face in the mirror

b. Frotó **su** cabeza contra su hombro (MF220)

he-rubbed his head against her shoulder

(58) は同一作品中、同じ動詞の直接目的語である同じ身体部位名詞に対し、定冠詞と所有詞が用いられている例である。

(58) a. Y tendió **la** mano para que le diera la bolsa (MF162)

and she-extended the hand for that her he-would-give the bag

b. Fernando tendió **su** mano por encima de la mesa (MF31)

extended his hand around on the table

(59)では同一主語の文が二つ等位接続されているが、一つ目の等位節では定冠詞、二つ目では所有詞が用いられている。

(59) Marta bajó **los** ojos y contempló **sus** manos (SB251)
lowered the eyes and contemplated her hands

不定冠詞が限定詞に現れる場合もあるが、目や手のように複数ある身体部位名詞に限られる。

(60) a. Guiñó luego **un** ojo a mi madre (SB19)
he-winked later an eye to my mother

b. Al menos no dejó **una** mano lánguida dentro de la mía (SB222)
at least not she-left a hand languid inside of the mine

c. La muchacha abría mucho **unos** ojos que eran dos manzanas azules y atentas (EM87)
the girl opened much eyes that were two apples blue and attentive

所有者が主語で、譲渡不可能所有名詞が前置詞補部に来る場合に定冠詞以外の限定詞が生起できるか否かは、動詞と前置詞によって異なる。所有詞が生起する場合と不定冠詞が生起する例を(61)と(62)に提示する。

(61) a. Te rodea con **sus** brazos (MR32)
you he-surrounds with his arms

b. Mostrándole el perrito que abrazaba en **su** pecho (MF26)
showing-him the dog that she-embraced in her bosom

(62) a. Sonrió con **una** boca de dientes disciplinados (EM33)
he-smiled with a mouth of teeth disciplined

b. Se había herido levemente en **una** ceja (LC138)
he-had hurt slightly in an eyebrow

所有者が間接目的語の場合、譲渡不可能所有名詞の限定詞は定冠詞に限られる。(63)は譲渡不可能所有名詞が直接目的語の場合である。同じ動詞で所有詞を用いると与格接語はなくなる。

(63) a. Me acariciará **la** cabeza (SB52)
me she-will-caress the head

b. Marta acarició **mis** manos (SB252)
caressed my hands

所有者が間接目的語で、譲渡不可能所有名詞が主語の場合も、限定詞は定冠詞に限られる。主語は動詞に前置する場合も後置する場合もある。

(64) a. **El** corazón le latía con fuerza en el pecho (MF134)
the heart him beat with force in the chest

b. Le temblaba **la** pierna izquierda (EM59)
him shook the leg left

所有者が間接目的語で、譲渡不可能所有名詞が前置詞補部の場合も、限定詞は定冠詞に限られる。同じ動詞で前置詞補部の譲渡不可能所有名詞の限定詞が所有詞の場合、間接目的語の与格接語はな

くなる。

(65) a. La melena negra le caía ingrávida sobre **los** hombros (MF16)
the mane black her fell light over the shoulders

b. Sus rizos caían salvajes sobre **sus** hombros desnudos (MF49)
her curls fell wild over her shoulders naked

所有者が直接目的語で、譲渡不可能名詞が前置詞補部の場合も (50d, g) の例のように、限定詞は定冠詞に限られる。

4.2. 動詞 tener

所有・所属の意味をもつ動詞 tener の場合は、他の動詞とは異なる振る舞いを示す。身体部位名詞は定冠詞を伴う場合(66)と、不定冠詞を伴う場合(67)があり、どちらも形容詞・形容詞句を伴う。一つしかない身体部位名詞も不定冠詞を伴える。所有詞とは共起しない。

(66) a. Tenía **las** manos entrelazadas (EM59)
he-had the hands crossed

b. Tenía **la** boca llena (MR44)
he-had the mouth full

(67) a. Tenías **una** cara rara (MF 192)
you-had a face strange

b. Siempre has tenido **unas** manos muy largas (MF208)
always you-have had hands very long

tener の目的語の身体部位名詞は無冠詞の場合もあり、形容詞句を伴う[9]。

(68) a. Tenía mala cara, pero se encontraba mucho mejor (SB226)
he-had bad face, but he-found himself much better

b. Mi abuelo fue dejando de tener cara de muerto (MR86)
my grandfather was stopping to have face of dead

c. Mi nieto, mi Manolito, tenía cuerpo de viaje (MR31)
my grandson, my Manolito, had body of trip

以上全ての事例で、tener の直接目的語として生起する身体部位名詞は、形容詞句を要求し、形容詞句を要求しないのは(69)のような場合のみである。

(69) a. Las tapas han sido hechas para la gente que tiene dientes (MR22)
the tapas have been made for the people who have teeth

b. Era como si no tuvieras ojos en la cara (MF195)
it-was as if not you had eyes in the face

これらの文が不自然ではないのは、(69a)の dientes のような身体部位は存在しない状態もあり得るもので、(69b)の ojos は通常存在しないことはあり得ない身体部位だが、仮定的に存在が否定されているからである。

その他の場合は形容詞によって身体部位名詞の状態・性質を叙述し、tener に所有の意味はない。

動詞 poner も一つしかない身体部位名詞が不定冠詞を伴い、形容詞句と生起することができる。

(70) Yo puse **una** cara muy triste (MR32)

I put a face very sad

4.3. 形容詞の共起制約

譲渡不可能名詞が定冠詞を伴う場合、通常記述形容詞による修飾は不可能である。しかし(71)のように、限定詞が定冠詞であるのに記述形容詞を伴う例もある。

(71) a. **La** melena negra le caía ingrávida sobre los hombros (MF16) = (65a)

the mane black her fell light over the shoulders

b. Álvaro se atusó **el** pelo caótico (EM66)

smoothed the hair chaotic

c. La portera se cubre **el** cuerpo desnudo con una bata (EM39)

the doorwoman covers the body naked with a bathrobe

(72)が示すように、限定詞が所有詞、不定冠詞、指示詞の場合、形容詞・形容詞節が共起できる。

(72) a. Sus rizos caían salvajes sobre **sus** hombros desnudos (MF49) = (61c)

her curls fell wild over her shoulders naked

b. Al menos no dejó **una** mano lánguida dentro de la mía (SB222) = (65b)

at least not she-left a hand languid inside of the mine

c. Había estrechado **aquella** mano decrépita y rival (EM72)

he-had shook that hand decripit and rival

複数ある身体部位名詞の場合は(64b)のように限定形容詞の修飾が可能である。

定冠詞を伴う譲渡不可能所有名詞が品質形容詞を伴えないのは、Guéron の言うようにそれが指示表現ではない、あるいは Vergnaud and Zubizarreta の提案するようにタイプ表現だからである。(71)のように定冠詞と共に品質形容詞が生起する場合は、指示表現またはトークン表現になっているということになる。所有詞を伴う譲渡不可能名詞に品質形容詞を付加できるのは、定冠詞を伴う場合とは異なり指示表現であるからだと考えられる。

4.4. 配分的解釈

定冠詞を伴う譲渡不可能所有名詞は、配分的解釈を受ける。

(73) a. Levantaron la mano (SB220)

they-raised the hand

b. A los dos se les desgarraba el corazón (MF247)

to the two them broke the heart

c. Nos dimos la mano cortésmente (LC43)

us we-gave the hand courteously

これらの場合、所有者が複数であっても、譲渡不可能所有名詞は単数になる。配分的解釈が可能なのは、スペイン語の定限定詞がもつ PRO 素性、あるいは虚辞性により、譲渡不可能所有名詞が所有

者と関係付けられることによると考えられる。

5. おわりに

本稿では、スペイン語の譲渡不可能所有構文の統語的特徴を、先行研究に基づき考察した。譲渡不可能所有名詞は、その内在的意味の一部として所有者が含まれる、意味的依存関係をもつ名詞である。譲渡不可能所有名詞を含む文は統語的にも所有者の存在を要求する。所有者は譲渡不可能名詞を含む文の主語、間接目的語、直接目的語のいずれかである。スペイン語では限定詞が AGR 素性をもち、所有者と統語的に関係付けられるため、所有詞が要求されず、譲渡不可能所有名詞の限定詞には定冠詞が生起する。

所有者が主語の場合、譲渡不可能所有名詞の限定詞に所有詞を用いると AGR 素性の余剰性により不自然さ、何らかの強調などを生むが、完全に非文法的なものとして排除はされない。これと対照的に所有者が間接目的語の与格接語の場合は、譲渡不可能名詞の限定詞に所有詞は生起できない。この事実は、採取したデータを見る限り確かである。特に与格接語が動詞の要求する間接目的語ではない所有与格の場合が、スペイン語のこの構文における最も典型的な類である。直感的に述べると、所有与格の構文では所有者の人称・数素性を与格接語が担い、定性を定冠詞が担うため、譲渡不可能所有名詞の限定詞が所有与格に対してもつ依存性が、所有者が主語の場合よりも強いと考えられる。

本稿では基本的事実関係を捉えることを主眼としたため、独自の分析の提案には至っていない。特に動詞の意味に基づく分析を今後の課題としたい。

注

1) Kliffer（1987）によると、関係名詞には身体部位、親族語、車や住居のような個人領域にあるものの三種があり、Keenan and Comrie（1977）が関係節化に関して提示したように、身体部位＞親戚関係＞個人領域にあるものという階層性を仮定できる。本稿では身体部位名詞に議論をしぼる。なお第1節及び2節の例文はすべて参照した文献からのものである。英訳は単語訳のみをスペイン語の下に付し、紙面の制約のため完全な訳は省略した。

2) 所有与格と同一指示の所有詞は通常共起できないが、方言によっては次の例のようにそれが可能な場合がある。

(i) Le lavé sus heridas
him I washed his hurts　　Picallo y Rigau（1999, 1011）

3) 身体部位名詞が定冠詞と共起する場合に形容詞の生起が制限されることは、Kayne（1975, 169）の指摘による。

4) タイプとトークンの文法への関連性は Carlson（1977）が論じているが、Vergnaud and Zubizarreta によると両者は S 構造関係では区別できず、Chomsky（1981, 324）による領域 D において区別される。トークンは世界の実体と直接に関連付けられても付けられなくてもよいが、タイプは直接には関連付けられず、トークンとして具現化（instantiation）することで、間接的に世界の実体と関連付けられる。

5) 彼らによると、譲渡不可能所有の意味的依存は、形式文法において語彙表示の項依存に反映される。

6) denotation を reference とは異なる概念であり、denote する表現類には指示的（referential）表現も、非指示的（nonreferential）な定表現および不定表現も含む。(Vergnaud and Zubizarreta 1992, 611)

7) 彼らが指摘するように、英語でもフランス語でも、動詞が raise, wash, examine などの場合はこの関係は成り立たない。

(i) a. John raised the children's hands　　c. John raised the children
b. * John raised the children at hand(s)

(ia) を (ib) のように言い換えることは不可能である。また (ia) が表わす命題と (ic) の表わす命題との間に含意関係は成立しない。(10a)の譲渡不可能句は直接目的語に束縛されている DP であり、換喩関係とはそのような束縛関係の確立に対する制約であるとされる。

8) 第 3・4 節の例文は全てスペインの現代小説から採取した。各例文の末尾に作品名の頭文字と頁番号を付してある。

9) Picallo y Rigau (1999, 1005) が指摘するように、身体部位名詞が無冠詞で形容詞を伴わない (ia), (ib) はそれぞれ「臭覚に敏感だ」、「無口だ、賢くない」の意味であり、譲渡不可能名詞として使われているわけではない。

(i) a. Este chico tiene nariz
this boy has nose

b. Este chico no tiene boca/ cabeza
this boy not has mouth/ head

参考文献

Alcina, F. J. y J. M. Blecua 1975 *Gramática española*. Madrid: Gredos.

Bello, A. 1988 *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos. Con notas de Rufino José Cuervo. I.* Estudio y edición de Ramón Trujillo. Madrid: Arco/Libros.

Carlson, G. 1977 *Reference to Kinds in English*. Doctoral diss., University of Massachusetts, Amherst.

Chappell, H. and W. McGregor (eds.) 1996 *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Chomsky, N. 1981 *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Demonte, V. 1988 El 'artículo en lugar del posesivo' y el control de los sintagmas nominales. *Nueva revista de la filología hispánica* 36: 89-108.

Fernández Ramírez, S. 1987 *Gramática española*. 3.2. *El pronombre*. Madrid: Arco/Libros.

Gili Gaya, S. 1961 *Curso superior de sintaxis española*. Barcelona: Bibliograf.

Guéron, J. 1985 Inalienable Possession, PRO-Inclusion and Lexical Chains. *Grammatical Representations*, ed. by H.-G. Obenauer and J.-Y. Pollock. Dordrecht: Foris, 43-86.

Kayne, R. 1975 *French Syntax: The Transformational Cycle*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Kliffer, M. D. 1987 Los sustantivos intrínsicamente relacionales: Un examen multinivelístico. *Revista española de lingüística* 17: 283-299.

Picallo, M. C. y G. Rigau 1999 El posesivo y las relaciones posesivas. *Gramática descriptiva de la lengua española*, ed. por I. Bosque y V. Demonte, Real Academia Española. Madrid: Espasa Calpe, 973-1023.

Real Academia Española 1973 *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe.

Vergnaud, J.-R. and M. L. Zubizarreta 1992 The Definite Determiner and the Inalienable Constructions in French and English. *Linguistic Inquiry* 23: 595-652.

Zagona, K. 2002 *The Syntax of Spanish*. Cambridge: Cambridge University Press.

データ

Cercas, J. 2003 *El Móvil*. Barcelona: Tusquets. (EM)

Martin Garzo, G. 1999 *Las historias de Marta y Fernando*. Barcelona: Destino. (MF)

Montero, R. 2003 *La loca de la casa*. Madrid: Alfaguara. (LC)

Lindo, E. 1998 *Manolito on the road*. Madrid: Alfaguara. (MR)

Puertolas, S. 1999 *La señora Berg*. Barcelona: Anagrama. (SB)